

保育園にじのおうち「審査委員特別賞実践提案研究会」開催レポート

2022年1月20日(木)、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「審査委員特別賞」を受賞した、企業主導型保育所 保育園にじのおうちによる「審査委員特別賞実践提案研究会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoomミーティングによるオンラインで実施いたしました。南は宮崎県から北は北海道まで、認定こども園・幼稚園・保育所、大学等の保育者養成校・行政機関等の保育関係者、異業種の方も含めて約80名(端末数)の参加がありました。

以下に保育園にじのおうちによる開催レポートを掲載いたします。

発表会概要

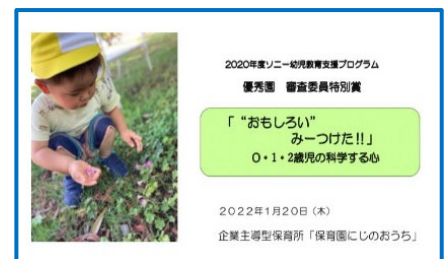
1. 日時:令和4年1月20日(木)13:00~16:30
2. 主題:「科学する心を育てる」「“おもしろい”みーつけた!!」0・1・2歳児の科学する心
3. プログラム
 - 1) 開会式・研究発表、保育動画視聴、質疑応答 13:00~13:50
 - 2) 研究協議(グループ討議)とまとめ 13:50~14:50
 - 3) 記念講演 15:00~16:00
演題:「誕生からの乳幼児教育を考える~3歳未満児を中心に~」
講師:神戸大学大学院 教授 北野 幸子氏
 - 4) 閉会式 16:00~16:15

研究発表 研究主題『科学する心を育てる「“おもしろいみーつけた!!”」0・1・2歳児の科学する心』

本園では、子どもたち自身が安心して一日の過ごし方を見通し生活できること、子どもたちの育ちや生活のあり様は一人一人違うと言うことを念頭に、それぞれの生活リズムに応じて生活習慣の自立を援助することに重点をおき園生活を作っている。そして、【“一人一人の「自分で！」を大切に、それぞれが主体となって生活する力を育てる”を土台に、「なんだろう?」「やってみたい」という挑戦する心や好奇心、探求心を大切に育てる】ことを保育目標に、日々の保育の積み重ねを行っている。さらに、身の回りのものごとや自然への興味関心と、そこに自らかかわっていく力、つまり「科学する心を育てる」ことはこれからの社会を生きていく上でとても重要になると考え、保育の大事な視点ととらえている。

本園の園児は0・1・2歳児という年齢の小さな子どもたちだが、日々の生活の中から見えてくる姿から、実は0歳児から「科学する心」は芽生え育っていて、その始まりは子どもたちの「“おもしろい”みーつけた!!」だと実感している。

当日は、論文を基に、0歳児の「透明なカップ」の事例、1歳児の「雨の日の散歩」「ダンゴムシ探し」の事例、2歳児の「影遊び(見てー!電車だよ!)」の事例を発表した。また、日頃の0・1・2歳児の遊びの様子を『0歳児 “おもしろい”との出会い』『1歳児“おもしろい”の共有・“おもしろい”をくり返す』『2歳児“おもしろい”を自分で確かめる』という観点でまとめた保育の動画を配信した。子どもたちの“おもしろい”を深め支えていくためには、身近な大人(保育者)の様々な援助(環境構成・人的環境)が重要である。保育者が答えを急がせるのではなく、0・1・2歳児の生活や遊び、“おもしろい”との出会いがその後の学びのスタートラインであると捉え、子ども一人一人の発達にあった丁寧な関わりとじっくり待つことを大切にし、普段の何気ない日常の生活の中で繰り返されている子どもたちの姿をしっかりと見取り、丁寧な保育を積み上げていきたいと考えている。



質疑応答

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料について、質問を受け付けた。内容を当日Q&Aの形でお答えした。また、研究会終了後アンケートの中に寄せられた質問についてここにお答えを掲載する。



Q1:子どもの「“おもしろい”みーつけた」が可能になるための時間と空間の確保とともに、保育者の「こう育って欲しい」というねらいの具体的な視点を知りたい。大人の価値観が入りがちになる「ねらい」について詳しく知りたい。

A1:育ちのスピードや時期、現れ方などは一人一人、個々に違うかもしれませんが、人が育っていく道のり、発達の筋道は昔から変わらず、どの子どもも同じだと言えます。そこで、まずはその「人が育っていく道のり、発達の姿」について学び、理解を深めることが大事だと考えます。その発達の姿、道のりを念頭におき、その子その子の発達欲求、「こんなふうになりたい、こうなりたい」など、目の前の子どもが今、どこを見て、どうしたい、どう踏み出そうとしているかという、その姿と発達の道のりを照らし合わせながら、その発達欲求を叶えるためにはどんな環境があるといいのか、どんな援助をしていけばいいだろうかをありのままの子どもの姿をしっかりと見ることから考えていきたいと思っています。

例えば、ままごと遊びを例にとっても、1歳児が見立てて遊ぶ、つもり遊びを楽しみ、それをまずは大好きな保育者を相手にして遊びを楽しむ姿から、友達と会話を楽しみ、言葉のやり取りをしながら、「カレーが食べたい」「ジュースをください」など、相手の思い、相手の要求を聞いたり考えたりしながらごっこ遊びを楽しめる2歳児とでは同じままごとコーナーでも遊びの内容が違ってきます。目の前の子どもの姿から発達の姿を読み取り、環境やかかわり方を変えていくことが必要だと考えます。1歳児や2歳児で、また同じ年齢でも年度当初と年度終わりでは、同じ遊びでも置くものや設置の仕方が変わってくると考えています。

Q2:幼児以上に乳児期は生活や経験が少ない中で、環境を考える時どういう風なことをより大切に準備したり、考えたりしておられますか？

A2:0・1・2歳児は、生活や経験が少ない分、初めて出会う出来事が3・4・5歳児より多いのではないかと考えています。大人が当たり前や慣れっこになって、大切な初めての出会いを見逃していることはないだろうか…と子どもたちの仕草や表情をできるだけ深く読み取ることをいつも意識しています。例えば、子どもたちが「わぁ〜」と喜ぶ姿や、何度も繰り返し試す姿だけでなく、立ち止まってじ〜っと見ている姿も“おもしろい”に出会った瞬間だと受け止めています。

0・1・2歳児の子どもたちの環境を考える時、私たちが大切にしていることは、まず発達に応じた環境であること、目の前の子どもたちが今、何に興味を示しているのかをしっかりと見ること、季節を感じ自然物と触れ合えること、そして感性豊かに育つため美しいものや色との出会いを大切にしながら環境作りを考えています。大人に手助けしてもらわないと触れられない環境ではなく、子ども自身の意思で関われ、子どもが「やってみよう!」と思った時に自ら手を伸ばせるような環境設定を大切にしています。

<終了後のアンケートの質問にお答えして>

Q1:どうしたら全ての先生方がこれだけの保育意識を共有できるのでしょうか？

A1:施設の性質上、職員数・園児数ともに少人数で保育意識を共有しやすい環境であることは大きく影響していると思っています。目の前の子どもの様子に合わせて臨機応変に援助の仕方を変えていくことはありますが、食事の介助の仕方やおむつ替えの時の援助の仕方、例えば食事の時の食器の並べ方一つにしても簡単な園生活のマニュアルのようなものを作成し、どの保育者が行ってもできるだけ同じになるよう意識しています。こういった取り組みをするときや保育室の環境を設定するときなど、ただ単に方法を伝え、合わせるのではなく、「なぜそういう取り組みをするのか」という部分に重点をおき話し合いを重ね、職員の意識を保つように取り組んでいます。

また、園内研修を通しての意識の共有については、一つの事例を基に、その時子どもがどう感じていたのか、環境設定はどうであったか、保育者の関り方はどうであったか、自分ならその場面でどういう関りをしていたかなどの意見を出し合い、それぞれの意見を否定するのではなく「なるほど!そういう見方もあったのだ」と保育者の視野を広げながら保育観の共有を図るような取り組みをしています。

グループ協議

ブレイクアウトルームを利用し当園職員・参加の皆さんで5グループに分かれ研究協議を行った。

「0・1・2 歳児の子どもの気づきや学びについて語り合おう」～発表論文や保育の動画から大人(保育者)のかかわりや援助・保育環境などをふまえて「学び」を考えよう～をテーマに意見交流を行う有意義な場となった。

各グループの協議から内容を抜粋し掲載する。

《当園の保育についての感想》

- ・ 子どもたちの遊びの様子や姿から「おもしろい」と思ったことを保育者が感じたり、「おもしろい」と思う視点が大事にされたりしている。
- ・ 乳児の保育について実践することや、論文を書くのは難しいが、今回にじのおうちの論文を参考に『提供しすぎない保育・普段ある姿を大切に深めていく保育』を職員と共有し進めていくようにした。動画はイメージしやすく分かりやすかった。
- ・ 特に0歳児の発達を見る目がすごいと感じた。観察して、それを連続で見ていることに気付ける職員の力に感動した。0・1・2歳児への適切な関りと瞬間を見逃さない姿がすごいと思った。
- ・ 何気ない日常の中で、一人一人の驚きや発見を大切にされている。また、一人一人の成長を丁寧に考えながら保育環境を整えていることを改めて学んだ。

《子どもの理解に関すること》

- ・ 保育する中でいろいろな場面で大人が先に言ってしまうたり、行動に移ってしまうことがあるが、子どもが気づいたり気づきを待って一緒に考えたり共有できるようにしていくことが大事なのだと感じた。
- ・ 過剰な関わりをし過ぎていないところが子どもの探究心を育てていると感じる。
- ・ 子どもの気持ちを想像して見極めて関わっている。想像をめぐらす事の大切さを感じた。
- ・ 子どもの見取り方が一貫し、共有されている。何気ない姿をどう捉えるか、捉える力が記録を通して保育者の力を育てていくことに通じると感じた。
- ・ 言葉がまだうまく話せない子どもたちでも、子どもの視線や反応、行動を読み取り、「科学する心」を育むことやたくさん学びがあることに気づいた。
- ・ 「科学する心」のおもしろいや不思議だな、なぜだろうと思う心の感覚の鋭さは3歳児までの方が、それ以上の子どもたちよりアンテナが高いのかもしれない。

《ドキュメンテーションについて》

- ・ 子どもたちの様子や発達を通して、今の姿やできるようになったこと、見たり気付いたり、触れたり感じていることなど、保護者と共有したいことを記録して作成している。(メモ・写真付き)
- ・ 写真を使ったドキュメンテーションを活用している。輝いている姿を写真に撮り、しばらく追い続けることで同じ遊びで子どもたちが変化させていく様子などを保護者に伝えている。
- ・ 写真を印刷し、画用紙などに貼って子どものつぶやきやコメントを付ける形で作成している。しかし、毎日ではできないのが現状。
- ・ ドキュメンテーションは毎日出している。アプリを使っている。写真のほかに文字を打ち込むことができ、15分ほどで出来る。時間もかからず手早くできる。アプリを利用する前はにじのおうちのように画用紙・写真を使って作っていた。短時間でできるので子どもたちの午睡中に作成している。
- ・ 月に一度、作成したドキュメンテーションを使いグループに分かれフリートークをしている。ゴールのないトークではあるが次の保育に繋がっていけるように話し合っている。いろいろな意見を出して、次のステップに繋がっている。

《園内研修や事例検討など職員の保育意識の共有に関すること》

- ・ 各担任がまとめた事例を基に、職員間で意見交換(こんな風を感じているかもしれない・もっとこんな環境があれば遊びが深まったのではないかな・保育者のこの場面のかかわり方は良かった…など)をすることで園全体での共通理解を深め、各保育者の学びや気づきに繋がり、それが次の保育へ繋がっていると感じている。
- ・ 保育の見直しをしていながら、環境についての話し合いや研修を重ねている。
- ・ 保育観のすり合わせを大切にしている。保育に正解がないのは素敵などころではあるが、園としては同じ関わり方・統一性をもって保育の質の向上に繋がりたいので、保育理念の共有や目指す子どもの姿、保護者への対応など目的ややり方など職員一人一人に行き渡るよう何度も伝え続けている。
- ・ 担任が責任をもって1年間保育をしていく中で、担任だけでは育てられない部分を園全体で育てていけるように心がけている。月に1回の職員会議で情報を共有し子どもたちを職員全体で育てていけるようにしている。
- ・ 小規模の園なので園児数も少なく職員会議の中でも子ども一人一人の発達状況や関わり方などを細かに伝え合い職員全体が共有できる環境である。

他にも各グループでは各園の取り組み、グループ内での質疑応答など活発に研究協議が行われました。すべてを掲載させていただくことはできませんが、たくさんのご発言をいただき大変感謝しています。ありがとうございました。

記念講演 「誕生からの乳幼児教育を考える～三歳未満児を中心に～」

北野 幸子氏 / 神戸大学大学院教授

3歳未満児の誕生からの乳幼児教育を考える中で、保育園にじのおうちの研究論文や発表と関連付けながらお話いただいた。内容を以下にまとめる。

日常の中にたくさんの科学がある。世界は科学で溢れ、子どもたちはその世界との出会いを積み重ねている。

安心、安全で居心地の良い場所がある事が、日常にある科学への気付きを支える

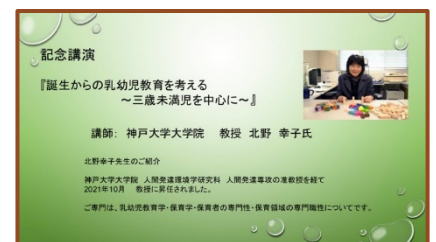
大前提であるが、肩の力が抜け、やわらかく幸せそうな子どもたちの表情からも園においてその大前提が大事にされていることが発表の中から感じ取れた。

偶然を見過ごさず、一人一人の子どもに心に応じ、どれだけフレキシブルに寛容であるか。ビデオの中の先生たちのことばや笑い声が聞き心地が良く、子どもに対しての尊厳を大事にされていると感じた。また、幼児理解、理解に基づく援助、環境の構成、再構成、そして記録を媒体とした同僚性に基づく実践力の向上が図られていると感じた。

子どもの生まれてからの発達や育ちのプロセスを考える時大事にしたいことは、発達の順序性である。発達における順序性の一般的な法則をしっかり捉え、個々の育ちに寄り添った支援や、見通しを持った保育を大事にしたい。

また0歳の愛着研究が着目されているが、粘り強く諦めない気持ちだけでなく、諦めて次はこうしようと気持ちに折り合いをつけるセルフコントロールの力や臨機応変さも、今必要とされている。心の芯をしっかりと持つことが、自分への信頼や他者への思いやり、自然を愛する気持ちへと繋がっていく。このことから0・1・2歳の時期の養護や愛着の大切さが再度確認されている。そういう観点から、自分の個性が発揮でき、認められ、受け入れられる環境と教育が、誕生からの子どもたちにとっても大切なことである。そのために関わる保育者が共に楽しむ中で、子どもの「もっと～したい」と思う気持ちを理解し、共感を深め、行為の背景にある意味や子どもの育ちに思考をこらすことが大事である。

「8歳までに経験したい科学」という本の中で子どもの科学的な育ちのプロセスが紹介されている。まずは気付き、関心を持ち、おもしろいと感じる事が科学的あそびのスタートとなる。乳児期は五感で感じ、親しみ、触れ合い、調べるという行為を体験的に積み重ねていくことをする。そうすると比べたり、分類したり、整理することが楽しくなり、良く知ろうと探究を深



め、人との共感や共有、共鳴の姿が見られる。その経験の積み重ねが科学的な探究の姿へとつながる。しかしそのためには十分な時間や空間、心のゆとりのようなものがどれだけ保障されているかがとても重要である。

研究論文、発表から共通して、子どもに対する尊厳つまり子どもへの尊敬の気持ち、子どものウェルビーイングが大切にされているということ、そして誕生からの子どもの育ちや「科学する心」を支える保育者の専門性の中に、乳幼児の知性への信頼を感じることができた。保育者が常に考え、自分も気づき感じる。その保育者の感受性というものが、結局は子ども理解の深化や環境の工夫、環境の再構成につながっていく。